

大乗社)が発刊されている。井尻は大正五年にポロブドゥルを見て以来その紹介を思い立ち、松本文三郎博士の所説に依拠しつつ、オランダのライデン大学教授クロムから写真複写と書籍の翻訳権を与えられて本書を完成したのであるが、三浦の場合は一年間に亘り現地に滞在して非常な努力の末千数百枚も写真を撮り、帰国後は大村西崖の指導のもとで研究を続け、ポロブドゥルのより完全な紹介につとめたので、学界に貢献すること更に大であった。

三浦秀之助(昭和八年七月二十五日歿)は大正五年本校彫刻科から西洋画科に転じて翌六年卒業した。大村西崖著「闇婆の千仏壇」

『東京美術学校校友会月報』第二十一巻第二号)その他によると、三浦は卒業後ポロブドゥルの研究を志し、黒田清輝を介して大村の指導を受けるようになったが、やはり現地へ行って研究したいと思い、費用を工面しようとしていると、当時盛んに文人画を描いていた西崖が、自分の絵でも金に換えることができるならば、喜んで描いて上げると言う。そこで早速三浦の郷里大阪の三越呉服店で展覧会を開くことになり、西崖は大正九年の夏休み六十日を費して五十幅計り描いて贈り、さらに大阪倶楽部で応援の講演まで行なった。絵は四十幅程売れて、三浦は数千円を入手することができたため、大正十年二月に瓜哇へ渡航することができた。渡航に先き立って同九年三月二日付で三浦に対し本校から「ジャワ、マヅラ及スマトラ古代美術ノ調査ヲ囑託ス」という辞令(上記月報第十九巻第一号)が出されているところを見ると、学校当局も幾許かの給費をもって応援したものと考えられる。一年後の同十一年三月、千数百枚の写真とともに三浦は帰国し、その五月には大阪三越で将来品の展覧会を開い

た。

『闇婆仏蹟ポロブヅル』は帰国の二年後に発行されるが、これに関連して『東京美術学校校友会月報』第二十一巻第二号には三浦がもたらした写真と上記の「闇婆の千仏壇」が、また同誌第二十二巻第四号には同じくポロブドゥルの写真と「ポロブヅルに現はれたる華嚴に就いて」と題する三浦の研究の一端が掲載された。なお、その後昭和六年十一月発行の同誌第三十巻第五号にも「ハダーの仏教彫刻」と題する三浦の寄稿が見られる。

⑪ 推古会

同会は正木直彦、岡田三郎助、吉川靈華、朝倉文夫、内藤伸、松田愚仏、田辺孝次、伊藤信次らが同人となって作った古美術鑑賞研究を目的とする会で、時折り本校倶楽部でテーマに基づいた展覧会を開いた。第一回展は大正十三年六月十五日で、各方面から集められた古代唐獅子(狛犬)およびその応用品百数十点が陳列され、千人近い来観者があった。第二回展は同年十一月十五、十六日で、軀および明器(土偶、俑等)が展示され、第三回展は同十四年四月十八、十九日で、絵巻物およびその残缺が展示され、第四回展は同年十月二十四、二十五日で、金銅仏が展示されたことが『東京美術学校校友会月報』や『十三松堂日記』から判る。